

1870年代における大新聞投書者の属性分析

——職業・世代の変遷を中心として

石 堂 彰 彦

はじめに

本稿は、1870年代の大新聞投書者を対象として、職業や出身地、年齢などの属性の調査・分析を行なうことで、この時期の投書者の全般的な傾向をあきらかにすることを目的とする。

調査対象とした新聞は、東京および横浜で発行された次の6紙である。『東京日日新聞』『郵便報知新聞』『朝野新聞』（『公文通誌』）『東京曙新聞』（『新聞雑誌』）『横浜毎日新聞』『日新真事誌』（以下、それぞれ『東日』『報知』『朝野』『曙』『横毎』『真事誌』と略記）。これら各紙の投書欄に掲載された投書の投書者について調査・分析を行なった⁽¹⁾。

ところで、この時期の投書者はそもそもどのような存在だったのだろうか。新聞に投書する者は、むろん新聞を読んでいただろう。かれらは新聞記事や他人の投書を読み、それらに対する質問や批判、あるいは社会にとって有益な情報や社会問題などを投書した。そして掲載された自らの投書に対する記者や他の投書者の反応を注視していたはずだ。投書者は、読者のなかでもとくに熱心な読者だったのであり、投書者の階層や地域構成は、読者層と無縁ではない。投書者の属性をあきらかにすることは、読者層をより具体的に把握する手がかりを得ることにつながるだろう⁽²⁾。

一方で、投書は投書欄だけでなく、社説として掲げられることもしばしばであった。そのため投書者はオピニオン・リーダーとして位置づけられ、その投書は世論形成に大きな意味をもつとともに、世論を反映していたとも考えられている⁽³⁾。投書は、投書者自身の考えだけでなく、当時の世論や投書者が居住する地域の思想状況などを知る手がかりなのである。さらに投書の内容は、その投書者の社会的地位などにも密接に関連していただろう。投書者自身の属性を知るということは、投書が書かれた歴史的・社会的背景を知ることであり、投書内容をより深く理解するうえで重要な意味をもつ。

誤解をおそれずにいえば、この時期の投書者は、情報の受け手であると同時に送り手でもある、両義的存在だったのである。こうした性格をもつ新聞投書者の研究は、新聞というメディアの受容実態や社会的影響のありようについて、豊かな知見をもたらす可能性を秘めているといえよう。

しかし投書者の研究は、読者層や論説記事などの研究の進展にくらべたとき、停滞しているとい

わざるをえない⁽⁴⁾。その要因は、おそらく投書者の調査のむずかしさにある⁽⁵⁾。一部の著名な人物を除けば、投書者の大半は各地域のごく狭い範囲でのみ知られた人物である。そのため、その人物にかんする情報がほとんど残されていないことが多い。投書に記載された署名が、通称であったり号であるような場合も、投書者を特定することが困難になる。また、この時期の投書の数がかわめて多いことも、調査をむずかしくさせる一因である。

とはいえ、近年の人名辞典⁽⁶⁾の充実やインターネットの普及により、人名にかんするさまざまな情報を、以前とはくらべものにならないほど短時間で収集できるようになった。またデジタル技術の進展は、膨大な数のデータを個人が分析することを可能にした。本研究は、このような環境下で可能となったのである。

以下で投書者の調査・分析結果を提示していくが、そのまえにひとつ確認しておきたい。投書者にかんする研究は、たんにその属性を分析するだけで終わるわけではない。属性の分析は投書者研究の基礎となるものであり、その分析のうえに、投書内容にかんする研究が行なわれなければならない。上述したように、投書者の属性と投書内容とを突き合わせ、投書者の投書意図や投書の背景、投書者が属する地域の思想状況などをあきらかにしていくことが、投書者研究のひとつの到達点となる。つまり投書者を絞ってさらに深く追究していく必要があるのだが、そのさい、大新聞の投書だけでなく、投書者が関与したであろう雑誌や地方紙なども調査する必要がある。そのため本稿では、投書内容の分析は行なわず、投書者の属性や投書数の推移などの量的側面に焦点をしばって分析している。

1. 属性判明者の概略

1-1 判明者数

本章では、投書者全体の状況を参照しつつ、調査によって属性が判明した投書者（以下、判明者）の全体的な傾向について検討する。

大新聞6紙の1870年代における投書者総数は10,618人、投書掲載数は15,642件、このうち判明者の数は1,037人、投書掲載数は3,167件である。投書者総数の約1割、投書掲載数では約2割について判明したことになる⁽⁷⁾。本稿末尾の付表に判明者の一覧を示している。

判明者の分析は次項から行なうが、ここでは投書者全体と判明者の関係について簡単に触れてお

表1 全6紙の投書者全体・判明者の人数および判明率の推移（単位：人）

投書掲載年	1872年	1873年	1874年	1875年	1876年	1877年	1878年	1879年
投書者全体	16	1,218	3,283	3,279	1,669	935	607	351
判明者	0	149	262	379	273	140	109	80
判明率	0%	12%	8%	12%	16%	15%	18%	23%

表2 新聞別の投書者・判明者の人数および判明率 (単位:人)

	投書者全体	判明者	判明率
東日	2,427	394	16%
報知	2,054	305	15%
朝野	2,674	239	9%
曙	1,143	142	12%
横毎	1,535	89	6%
真事誌	1,532	238	16%

わらず、投書者全体の数で『曙』を上回り、『横毎』とほぼ同数である。さらに『真事誌』は、判明者数で『曙』、『横毎』を上回っている。この判明者数の違いは、判明者のなかの官員数に起因すると思われるが、この点については次項で検討する。

なおいうまでもないが、判明者は投書者全体からランダム・サンプリング等によって抽出されたわけではないため、判明者の傾向をそのまま投書者全体に適用することはできない。判明者と投書者全体の関係を検討する際には、同時代の政治状況や各紙の特性など、量的傾向以外のさまざまな歴史的背景を考慮する必要がある。

1-2 個々の属性ごとの傾向

本項では、付表の属性項目ごとにその量的側面を検討する。必要に応じて、小新聞との比較も行なっている⁽⁸⁾。

まず族籍ごとの判明者数は、表3に示したように、華族13人、士族511人、平民303人である。拙稿で示した小新聞の士族54人、平民73人とくらべると族籍構成の比率がほぼ逆であり、小新聞と比較したかぎりでは大新聞に士族投書者が多い傾向がうかがえるが、士族が極端に多いともいえない数字である。華族の投書者がいることも、小新聞との違いである。また族籍ごとの投書掲載数は、華族から順に23件、1,758件、896件である。平民のなかには士族からの族籍替えを行なった者も含まれるため、実際には士族の比率はもう少し高くなるだろう。また、新聞別の族籍構成は表4のようになっている。『横毎』は判明者数自体が少ないためか、士族と平民の数が拮抗しているが、その他の5紙は、全体の族籍構成の比率とほぼ同じといってよい。

表3 判明者の族籍構成

族籍	人数(人)	投書掲載数(件)
華族	13	23
士族	511	1,758
平民	303	896

表4 新聞別の判明者の族籍構成 (単位:人)

族籍	東日	報知	朝野	曙	横毎	真事誌
華族	5	3	3	2	0	1
士族	194	170	124	72	34	116
平民	123	93	64	42	34	61

きたい。まず全6紙の投書者全体と判明者の人数および判明率の推移は表1のようになっている。判明率がしだいに高くなっているのは、初期を中心に1,000件以上あった無署名の投書や、「一書生」といった匿名の投書が減少していったことがおもな理由だろう。

新聞別の投書者と判明者の人数および判明率は表2のとおりである。『朝野』は投書者数が最も多いが、『東日』や『報知』にくらべて判明者が少ない。一方『真事誌』は1875(明治8)年末で廃刊したにもかか

つぎに投書者の地域構成だが、図1には全6紙の投書者全体および判明者の地域構成を示している。判明者は本籍（または出身地）だが、投書者全体では投書に記載された住所をそのまま示している⁽⁹⁾。そのため、その住所が本籍でないことがある。とくに東京や神奈川など、寄留者が多数を占める地域では、実際の本籍は住所とは別の府県であるケースがかなり多いだろう。しかし逆にいえば、都市部以外では、投書記載の住所が本籍と一致する可能性が高いと推定される。また、投書者全体と判明者の地域構成を見比べるとわかるように、遠隔地であっても投書者の多い地域では、判明者の数もそれに比例して多くなる傾向にある。このことは、判明者の地域構成が投書者全体の地域構成をある程度反映していることを示していると思われる。なお小新聞では東京や神奈川以外の地域は微々たるものだったが、大新聞では、都市部から離れた地域でも一定数の投書者が存在しており、大新聞は全国にかなり広範に普及していたといえよう。

表5、6には、新聞別の投書者全体および判明者の新聞別の地域構成を掲げている。投書者全体の表5では、新聞ごとにいくつかの特徴的な傾向をみてとることができるだろう。『朝野』は東京で、『横毎』は発行地の神奈川で、それぞれ突出している。だがそのぶん、とくに『横毎』は遠隔地の投書者が少ない傾向にある。『曙』も同様に地方で少ない。一方『東日』、『報知』、『朝野』そして『真事誌』は、遠隔地でも一定数の投書者が存在する。

地域ごとの投書者数にも特徴がある。東京およびその近郊で多いのは、新聞発行地が近いことから当然だが、群馬は比較的少ない。静岡が多いのは、知識人層である旧幕臣が数多く移住していることが一因だろう。大阪などの大都市部や新潟、兵庫といった開港地で投書者が多いことは、文明開化の象徴でもあった新聞に対する認知度の高さと同様関係しているだろう。福島や高知などの多さは、民権運動のさかんな土地柄を反映していると思われる。岡山や愛媛も多く、両県出身者で『曙』に関与した者が多いことはすでに指摘されており⁽¹⁰⁾、かれらが投書者としても活動していたことが大きいと考えられる。しかし三重が多い理由は判然としない。三重県で圧倒的に多いのは官員で

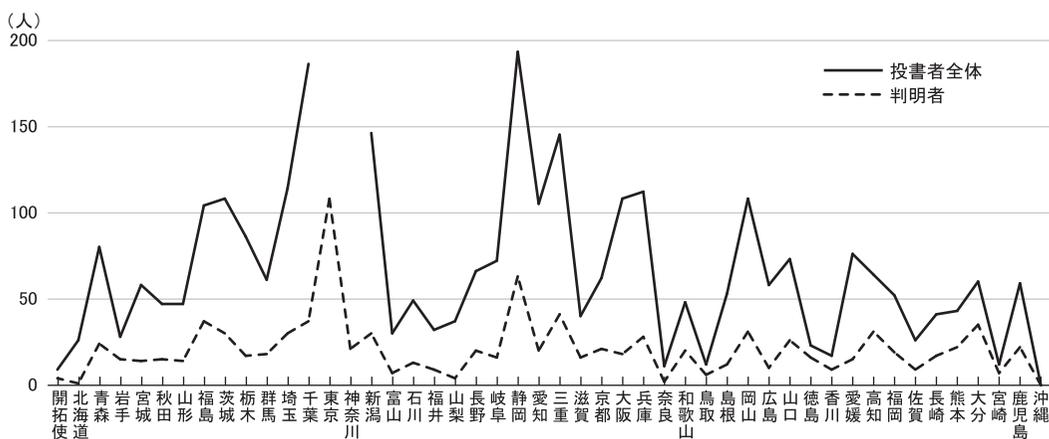


図1 全6紙の投書者全体・判明者の地域構成

(注) 投書者全体の東京(3,352人)と神奈川(500人)は人数が多いため省略した。

あり、ついで真宗などの宗教関係者となっているが、職業構成だけでははっきりしない。この背景を探るには投書内容なども参照する必要があるため、この点については稿を改めて検討したい。なお小新聞の投書者では山梨県が多かったが、大新聞ではかなり少ないことも興味深い点である。

表5 新聞別の投書者全体の地域構成(単位:人)

		東日	報知	朝野	曙	横毎	真事誌
東北地方	開拓使	2	2	0	0	0	3
	北海道	3	9	3	0	0	12
	青森	21	20	15	6	2	29
	岩手	7	7	11	3	3	5
	宮城	9	30	12	6	4	4
	秋田	11	6	10	10	7	11
	山形	11	16	9	4	5	12
関東地方	福島	36	20	20	18	9	10
	茨城	25	24	28	23	5	24
	栃木	29	15	22	15	3	14
	群馬	16	18	16	8	4	6
	埼玉	25	32	24	38	7	12
	千葉	40	47	54	24	12	25
	東京	622	494	1,230	489	305	399
中部地方	神奈川	34	24	26	6	425	18
	新潟	55	21	38	11	12	26
	富山	10	3	3	2	0	13
	石川	11	5	20	2	2	12
	福井	9	3	9	2	2	11
	山梨	5	1	6	5	5	16
	長野	18	9	12	4	11	15
近畿地方	岐阜	27	19	6	7	17	11
	静岡	50	63	45	10	14	36
	愛知	20	19	15	17	8	37
	三重	53	29	16	13	5	50
	滋賀	12	11	9	2	2	7
	京都	13	16	10	6	1	24
	大阪	39	20	20	11	6	24
中国地方	兵庫	36	18	31	5	14	26
	奈良	7	1	3	1	0	2
	和歌山	15	13	10	8	8	2
	鳥取	3	4	2	2	0	2
	島根	13	5	25	5	0	8
	岡山	41	26	19	24	4	16
	広島	18	10	8	5	2	24
四国地方	山口	22	14	7	12	7	20
	徳島	10	10	7	4	3	1
	香川	6	2	3	1	0	6
	愛媛	18	11	28	16	5	13
	高知	21	12	22	12	7	11
	福岡	19	8	5	6	5	13
	佐賀	15	5	2	3	1	5
九州地方	長崎	15	3	10	1	5	8
	熊本	12	9	13	4	2	12
	大分	19	17	12	6	2	14
	宮崎	3	5	4	0	0	2
	鹿児島	22	9	13	8	4	17
	沖縄	0	0	0	0	0	0

表6 新聞別の判明者の地域構成(単位:人)

		東日	報知	朝野	曙	横毎	真事誌
東北地方	開拓使	2	2	0	0	0	3
	北海道	0	1	0	0	0	0
	青森	9	7	4	3	0	12
	岩手	5	4	6	3	2	3
	宮城	3	9	3	3	2	1
	秋田	6	2	5	2	1	4
	山形	7	7	3	1	1	3
関東地方	福島	21	5	4	7	2	5
	茨城	10	8	7	7	3	9
	栃木	9	4	7	4	1	1
	群馬	6	6	4	2	3	2
	埼玉	16	8	7	11	2	4
	千葉	12	12	7	4	2	7
	東京	37	39	28	14	14	18
中部地方	神奈川	4	4	4	3	16	2
	新潟	8	9	9	4	4	3
	富山	3	1	2	0	0	2
	石川	3	3	6	0	1	2
	福井	3	2	2	0	1	3
	山梨	1	0	0	0	1	2
	長野	3	6	3	4	0	6
近畿地方	岐阜	8	4	2	1	3	6
	静岡	21	22	14	4	4	17
	愛知	6	8	3	3	3	5
	三重	19	11	5	6	0	17
	滋賀	7	3	4	1	1	3
	京都	8	7	3	3	1	6
	大阪	8	3	6	2	0	4
中国地方	兵庫	12	7	8	1	4	11
	奈良	1	1	1	1	0	1
	和歌山	7	8	6	4	2	1
	鳥取	1	4	1	1	0	0
	島根	5	1	4	2	0	0
	岡山	20	9	8	6	1	4
	広島	4	3	3	1	0	4
四国地方	山口	5	10	1	3	3	12
	徳島	9	8	5	3	3	0
	香川	3	2	2	0	0	3
	愛媛	1	6	5	4	1	5
	高知	13	8	14	9	0	6
	福岡	7	6	1	3	2	4
	佐賀	6	1	2	0	0	2
九州地方	長崎	6	2	5	1	2	2
	熊本	9	6	5	1	0	7
	大分	14	13	5	3	1	8
	宮崎	3	1	3	0	0	2
	鹿児島	11	6	2	1	0	10
	沖縄	0	0	0	0	0	0

年齢構成にも特徴がある。図2には大新聞と小新聞の判明者の生年構成を示したが、小新聞がほぼ横ばいであるのに対し、大新聞は世代が若くなるほど増加している。ピークは1853（嘉永6）年生まれの30人であり、1850年代後半生まれまで投書者数が多い。このことは、投書時の年齢が20歳代前半の者が最も多いことを示している。

最後に職業構成だが、まず目につくのは官員の多さであろう（表7）。判明者のほぼ半数の493人にのぼる⁽¹¹⁾。次に多いのが名望家の186人である⁽¹²⁾。また新聞・雑誌関係者も多い。教員（教育関係者）の投書者も一定数存在する。読者層に官員や名望家、教員が多いことはすでに指摘されているとおりが⁽¹³⁾、投書者でも同様に数が多いことは、読者層と投書者層がある程度相関していることを示唆している。

だが、読者層と投書者層に関連があるとすれば、医師や宗教関係者が教員と同程度の人数であることは、読者にも医師・宗教関係者がそれなりの規模で存在していたことを示すのだろうか。読者に医師・宗教関係者が一定数含まれることは、管見のかぎりこれまで指摘されたことがないが、かれらは教員同様にリテラシーが高い知識人層であり、大新聞の読者であったとしても不思議はない。さらに、医師は流行していた天然痘などに対応するため社会的に活発に活動していた。種痘に関係した医師は、たとえば大野松齋や中川良二のように、投書者に数多く含まれており、かれらのなかには種痘積善社という医療結社に参加する者もいた。また宗教関係者では、明治新政府のもとですすめられた廃仏毀釈やキリスト教の布教に関する問題、さらに政教分離問題などによって、政治に対する関心が高まっていた。僧籍の者が多数任命された教導職は、新聞縦覧所で説教を行なうこともあり、新聞は身近なメディアでもあったろう。宗教関係者で多いのは、神道関連が27人、真宗16人、キリスト教8人、真言宗7人などである。こうした医師・宗教関係者の多くが、この時期の激しく変動する政治社会情報を伝える大新聞の読者であったと推定することは、当時の状況をみれば妥当であるといえよう。

新聞ごとの職業構成では、とくに違いがあるのは官員数である（図3）。前項で新聞ごとの判明

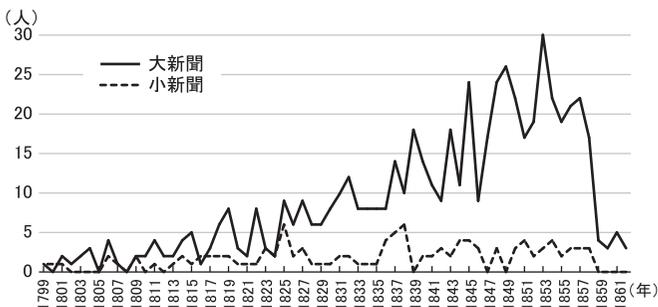


図2 大小新聞の判明者の生年構成

表7 職業別の投書者数
(単位：人)

職業	人数
官員	493
名望家	186
新聞・雑誌関係者	155
医師	75
教育関係者	77
宗教関係者	81

(注) 複数の職業にまたがる投書者がいるため、職業別の人数の合計は判明者数と一致しない。

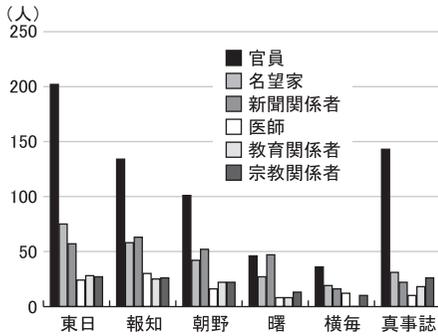


図3 新聞別の職業構成

とを示しているように思われる。読者層にかんしては、『報知』や『朝野』など民権派新聞より『東日』などの御用新聞に官員読者が多かったことが指摘されており⁽¹⁴⁾、それが投書者にも反映したと考えられるのである。

なお医師は小新聞投書者にも一定数存在していたが、宗教関係者は小新聞ではほとんどみられなかったことも指摘しておきたい。また小新聞投書者に多い都市の中小商人や戯作者も、大新聞投書者ではほとんど確認できなかった。

ここまで、判明者の属性ごとの特徴をみてきた。族籍の構成はほぼ通説どおりといえるが、地域や年齢の構成における特徴的傾向や、医師や宗教関係者が一定数存在することなど、これまで判然としなかった点についていくらかあきらかになったといえる。ただし、それぞれの属性について個別に量的傾向をみただけであるため、年ごとの変遷や属性間の関連などについてはふれていない。次章では、これらの点について検討する。

2. 官員、名望家、新聞・雑誌関係者の動向分析

本章では判明者の属性の量的側面について、属性間の関係をくわえてさらに詳しくみていく。その際、とくにこの時期の大新聞投書者のなかでも主要な職業階層であり、かつ判明者中の人数が多い官員、名望家、および新聞・雑誌関係者（以下、新聞関係者）を軸に検討していきたい。なお付表をみるとわかるように、判明者によって判明している属性はまちまちである。そのため、組み合わせる属性によって、対象となる判明者の数に違いが生じることになる。そこで集計のもととなる判明者を一定にするため、各属性すなわち生年・本籍・族籍・職業のすべてが判明している394人（華族1名は除外）を対象として、本章では分析を行なうこととする。

まず族籍と生年（年齢）の関係からみていこう。前章の図2では、全体として若い世代が右肩上がりで多くなっていくことを示したが、これを族籍別にみると、図4ようになる。士族のピークは1850年生まれの14人であり、さらにその右側に1853、56（安政3）年生まれの各13人の山がある。しかし平民は1848（嘉永元）年生まれの10人をピークとして、1850年代には減少する。判

者数についてふれたが、その数の差には、判明した官員の数が大きく関係している。官員数は『曙』、『横毎』が50人以下とかなり少なく、『朝野』も残り3紙にくらべると少ない。官員数がもっとも多いのは『東日』の203人で、『真事誌』がそれにつづいている。『朝野』は投書者数がもっとも多かったにもかかわらず、判明者数が少ない原因は、直接には、判明した官員数が少ないためである。これは太政官御用、左院御用を掲げた『東日』、『真事誌』などに官員の投書者が流れたこ

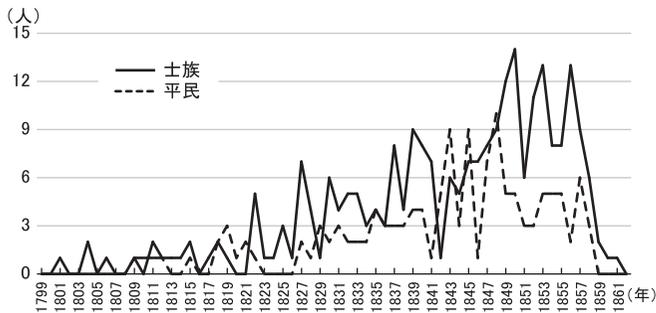


図4 族籍別の生年構成

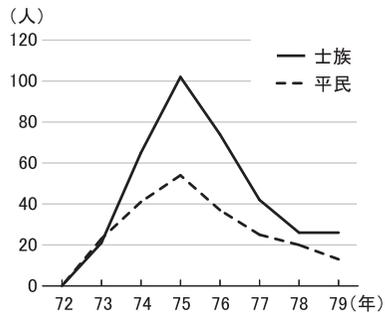


図5 族籍別の投書者数推移

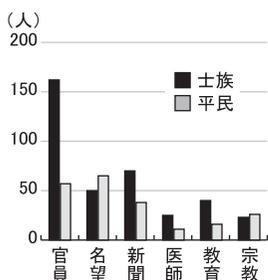


図6 職業別の族籍構成 (投書者数)

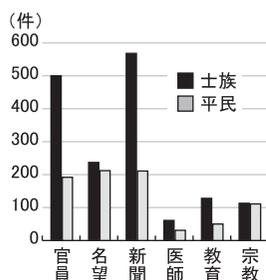


図7 職業別の族籍構成 (投書掲載数)

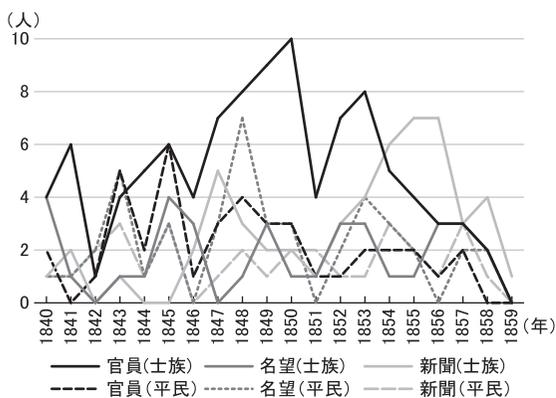


図8 族籍・職業別の生年構成

明者全体では1850年代まで増加していたが、それを支えていたのは士族だったのである。士族と平民のこのような年齢構成の違いは、のちに述べる職業構成とも関係する。

族籍別の投書者数の推移は、図5のとおりである。士族平民とも、1875年まで一貫して増加している。ただし増加数では士族が上回っている。1873(明治6)にはほぼ同数だったが、1874(明治7)年には両者の数に差が生まれ、1875年では2倍近い開きが生じている。その後はいずれも減少しているが、つねに2倍程度の数の違いが維持されている。

族籍と職業の関係は図6のようになっている。前章でみた士族と平民の全体的な構成比は5対3だったが、官員では士族162人に対し平民57人、構成比がほぼ3対1と、士族が占める割合がかなり高くなっ

ている。だが名望家は平民のほうが多く、士族50人に対し平民66人である。その他では士族が若干多い傾向にある。同様に投書掲載数について族籍と職業の関係を示したのが図7である。一見して新聞関係者の投書掲載数が多いことがわかる。図6と比較すると、他の職業では1人あたり平均投書掲載数は多くても3、4件だが、新聞関係者では1人あたり5～8件であり、他の職業にくらべ突出して多くなっている。

族籍と生年の関係については上述したが、これに職業を加え、職業と生年・族籍の関係のみを

きたい。ここでは官員、名望家、新聞関係者に絞って検討する。図8では、官員、名望家、新聞関係者をそれぞれ士族と平民に分けてグラフ化している。まずもっとも高い山を作っているのは、官員(士族)である。1850(嘉永3)年生まれは10人、1853年生まれは8人である。さらにその右側にあるのは、新聞関係者(士族)である。1855(安政2)、56年生まれがピークであり、いずれも7人となっている。1850年代後半生まれは、投書時に20歳前後と非常に若いが、この世代の士族が新聞関係者の中核となっている。この世代に属するのは、矢野文雄や小松原英太郎など、著名な人物も多い。図4でみたように、若年の士族は同世代の平民にくらべかなり多くなっていたが、職業では官員と新聞関係者がこの世代の士族の多数を占めていたのである。なお1840年代前半生まれでは、官員、新聞関係者いずれも士族と平民ではそれほど差がないが、世代が若くなるほど士族と平民の数に開きが出てきていることにも注意したい。

一方名望家では、これもすでにみたように平民が多く、生年のピークは1848(嘉永元)年の7人である。士族ほどではないが、名望家も比較的若い世代が中心といえよう。1840年代後半生まれの層は投書時に30歳前後であり、さきの図4で示した平民のピークは名望家を中心に形成されていたといえるだろう。

このように官員、名望家、新聞関係者いずれもが、比較的若い世代によって構成されており、投書者の属性を検討するうえで、世代が重要な鍵であることがわかる。そこでつぎに、世代と投書者数の関係を検討しよう。

図9には、10年単位の世代ごとに、投書者数の推移を示している。1800、10および60年代生まれはごくわずかのため省略した。1875年に最も大きなピークを形成しているのは、1850年代生まれの54人である。そのつぎに大きな山が、1840年代生まれの世代である。1850年代生まれの投書者が、1875年以降の投書者の多くを占めていることがわかる。一方で1874年以前をみると、1850年代生まれは少数であり、最も多いのは1840年代生まれ、つぎに1830年代生まれがつづいている。つまりこの図からいえることは、1874年と1875年を境として、投書者のあきらかな世代交代が生じたということである。

ではなぜ1850年代生まれの世代が、1875年に急増したのだろうか。この点をあきらかにするため、世代別の月ごとの投書者数の推移を示したのが、図10である。図では、1874年1月から1876

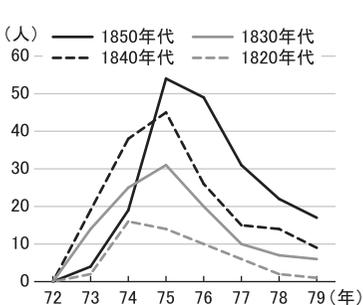


図9 世代別の投書者数推移

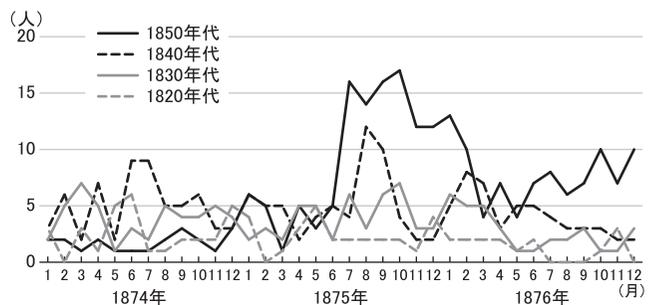


図10 世代別の投書者数推移(月ごと)

(明治9)年12月までの推移を示している。一見してわかるように、1850年代生まれが急増しているのは1875年7月であり、同年10月までの4か月にわたって15人前後の大きな山を形成している。その後はやや減少するものの、それ以前の水準にまで落ち込まず、一定の数を維持している。

つまり1850年代生まれの投書者数は、1875年6月以前はむしろ他の世代よりも少ないほどだったが、1875年7月以降急激に増加したことが、1875年全体の増加の要因だったのである。この増加の一因として考えられるのは、同年6月28日の新聞紙条例・讒謗律の布告であろう。新聞紙条例は当時の新聞にきわめて大きな影響をあたえたが、図のような急増をみるかぎり、その影響は新聞社だけでなく投書者にも及んだといえる。なおこの時期の新聞に大きな影響を与えた出来事としては、ほかに1874年1月18日に民撰議院設立建白書が『真事誌』に掲載されたことが挙げられるが、1875年7月以降の急激な変化とくらべると、建白掲載後の世代の変化はほぼないに等しいといつてよい。

ところで新聞紙条例の第8条では、投書とともに記載された氏名が実名でない場合、禁獄および罰金刑を科すことが規定された⁽¹⁵⁾。これにより、仮名ではなく実名を記載する投書が増加し、結果として今回の調査で属性がはっきりになった投書者がこの時期に増えたと思われる。だがこの条文だけでは、1850年代生まれの急増を十分に説明することはできない。というのは、もし条例の布告以前に筆名で投書していた者が、条例によって実名をあらわさなければならなくなったとすれば、他の世代でも同様にその数が増加しているはずだからである。1840年代生まれでいくらかの増加がみられるが、1850年代生まれの世代の急増とくらべれば増加の割合は小さく、その期間も短い。また、それまで他の世代よりも少ないほどだった1850年代生まれの世代が、条例以降に他の世代を圧倒するほど増加し、その後もほぼ他の世代を上回る状況がつづくのである。こうした点をふまえると、1850年代生まれの急増は、投書の実名記載の影響も皆無ではないが、実際に1850年代生まれの投書者数がそれ以前より大幅に増加したことが主要な要因であると推定するのが妥当であろう。この背景として新聞紙条例にからんだいくつもの要因が考えられるが、その検討には投書内容や新聞社側の政治的動向など、さまざまな側面に立ち入らなければならないため、この点については稿を改めて論じることとしたい。さしあたりここでは、条例による実名記載という、投書者調査に有利な状況が生み出されたことが主要な要因ではないことだけ確認しておけば十分だろ

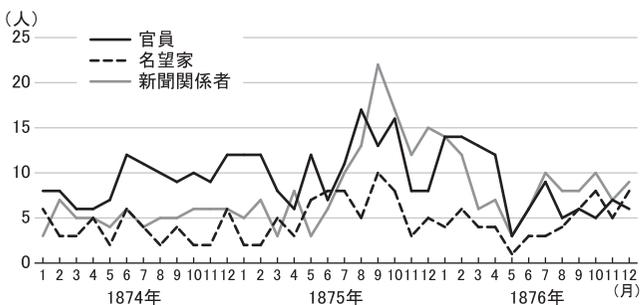


図11 職業別の投書者数推移

う。
さて、1875年に増加した1850年代生まれの世代だが、この増加は職業の面でも特徴がある。さきの図10と同様に、1874年1月から月単位で職業ごとの投書者数の推移を示したのが図11である。もっとも増加しているのが新聞関

係者であり、1875年9月に22人のピークをつくっている。つぎが官員だが、増加率は新聞関係者におよばない。名望家も若干増加しているものの、その数はごくわずかである。

さらにこれらの職業ごとに、世代別の投書者数の推移を図12に示した。もっとも顕著に増加しているのが、新聞関係者の1850年代生まれの世代である。官員の1850年代生まれの増加は新聞関係者ほどではないが、1840年代生まれ以前の世代では新聞関係者の数を上回っており、官員全体でみると新聞関係者より多くなっている。また名望家は1876年になってようやく、1850年代生まれの世代が多数を占めるようになる。つまり1875年7月以降の1850年代生まれの急増は、職業としては新聞関係者の増加によっておもに支えられていたといえる。新聞関係者の多くは民権運動とかかわりをもっており、このことは過激な言論を弾圧しようとした新聞紙条例が、かえって急進的な若年投書者を増加させる呼び水となったとみることもできるかもしれない。なお、さきの図5で1875年にかけて士族と平民の投書者数に大きな開きが生じたことを示したが、士族増加のおもな要因は、士族が大部分を占める1840、50年代生まれの官員および50年代生まれの新聞関係者の増加にあったのである。また新聞によって数に多少ばらつきはあるものの、各紙ともこの時期以降、1850年代生まれの投書者が多数を占める構造は同じである。

ところで、ここまで投書者の地域(本籍)構成について言及しなかったが、上述のような世代・職業構成を踏まえたうえで、最後にこの点について触れておきたい。表8は、職業ごとに、縦軸に10年ごとの世代を、横軸に地方をとった投書者数の分布である。表8の左側の表は判明者全体(394人)の分布を、その右側の表は順に官員、名望家、新聞関係者の分布を示し、さらに投書者数の多寡を網掛けの濃淡によって示している。いずれの職業においても、関東地方の投書者が多い。だがその他の地方では、職業ごとに一定の傾向性がみられる。まず官員の分布だが、判明者全体の分布とくらべると、世代、地域ともに、それほど大きな違いはない。新聞関係者では、判明者全体の傾向とくらべると若年層が多く、さらにその多くが西日本であることがわかるだろう。表には示していないが、西日本で新聞関係者が多い県は、高知県5人、岡山県8人、大分県8人などである。また名望家は、新聞関係者とは逆に西日本で少なくなっており、東日本でやや数が多い。東北地方では福島県の7人が最多であり、青森県と山形県の各4人がこれにつづいている。このように官員、

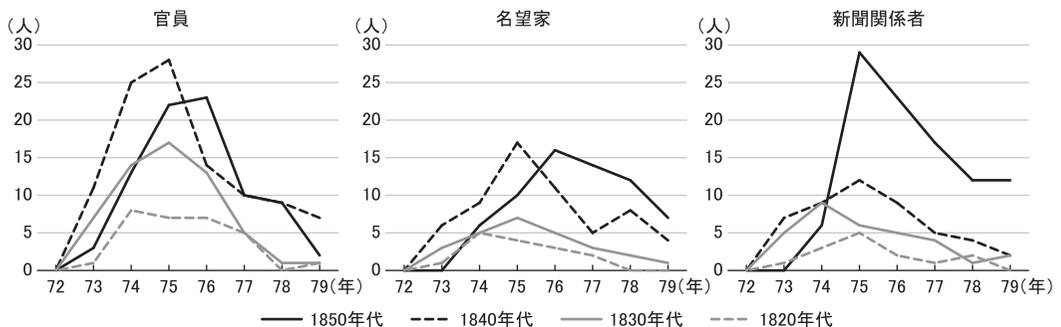


図12 職業ごとの世代別投書者数の推移

表 8 職業ごとの世代と本籍の分布

判明者							官 員						名 望 家						新聞関係者																				
年代	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	年代	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	年代	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	年代	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州								
1800	0	2	1	0	1	1	1	1800	0	0	0	0	1	0	0	1800	0	0	0	0	0	0	0	1800	0	0	0	0	0	0	0	1800	0	0	0	0	0	0	0
1810	3	5	5	4	2	0	2	1810	1	4	3	1	1	0	1	1810	1	1	1	1	0	0	0	1810	0	1	0	1	0	0	1	1810	0	1	0	1	0	0	1
1820	4	8	9	3	5	1	2	1820	3	3	5	3	5	1	2	1820	2	2	2	3	1	0	0	1820	1	3	1	0	0	0	0	1820	1	3	1	0	0	0	0
1830	11	20	10	11	8	6	14	1830	6	9	5	7	4	4	11	1830	4	5	4	1	3	0	3	1830	0	5	2	1	2	1	4	1830	0	5	2	1	2	1	4
1840	18	30	33	16	9	7	11	1840	12	18	20	12	6	4	9	1840	9	11	10	6	3	2	3	1840	5	11	6	2	1	2	4	1840	5	11	6	2	1	2	4
1850	11	24	27	22	13	10	22	1850	6	10	17	9	3	4	12	1850	4	11	7	5	4	1	5	1850	2	11	7	9	9	5	11	1850	2	11	7	9	9	5	11
1860	0	0	0	1	1	0	0	1860	0	0	0	0	0	0	0	1860	0	0	0	1	1	0	0	1860	0	0	0	0	0	0	0	1860	0	0	0	0	0	0	0

(注) 東北には北海道・開拓使を含む □ 0~4人 □ 5~9人 ■ 10~19人 ■ 20人~

名望家、新聞関係者の地域構成には、若干の相違がみられる。

以上、本章では、投書者の主要な職業である官員、名望家、新聞関係者を中心にその動向を検討してきた。1840 年代生まれの世代までは士族と平民はほぼ同数だったが、1850 年代生まれでは士族が圧倒的に多い。これら士族の大半は、官員か新聞関係者であり、新聞関係者は西日本に多い傾向があった。一方の平民は、官員をのぞくと名望家が多く、この名望家層は新聞関係者にくらべると東日本にやや多かった。そしてとくに特徴的傾向がみられたのは、時間軸でみた投書者の変遷である。1874 年ころまでは、官員を中心とした 1840 年代生まれ以上の世代が、投書者の多くを占めていた。しかし 1875 年 6 月の新聞紙条例・讒謗律の布告以降、1850 年代生まれの新聞関係者が急増し、官員や名望家でも 1850 年代生まれが他の世代を上回るようになっていった。投書者におけるこうした変化の背景については本稿の範囲をこえるため検討しなかったが、このような世代の変遷は、同時代の新聞の動向を考察するうえで、重要な意義をもつ可能性があるといえよう。

むすびにかえて

本稿では、1870 年代の大新聞の投書者について、さまざまな角度から検討してきた。むろん、さきに述べたように、本稿で提示した投書者の傾向は、あくまでも調査によって属性が判明した投書者の傾向であり、これが投書者全体の傾向とどの程度一致するかについては慎重な検討を要する。こうした限界はあるが、それを踏まえても、判明者の動向にはなお注目すべき点があると思われる。

職業では官員や名望家が読者に多いことはたびたび指摘されてきたが、医師や宗教関係者が投書者にすくなく存在したことは、読者にも同様に一定数存在したことを示唆するものであろう。若年層が多いこともある程度推測されていたが、大新聞に投書欄が生まれてまもない 1873、74 年ころは、投書者に比較的年長の世代のほうが多かったことは、その背景も含めてさらに探究する必要があると思われる。

そしてとくに注目したいのは、やはり 1875 年 6 月の新聞紙条例・讒謗律布告後における世代の変化である。これまで、新聞の政治的動向に大きな影響を与えたものとして、1874 年 1 月に『真

事誌』に掲載された民撰議院設立建白書が指摘されることが多かった。それによって、新聞に政治的意見を投書する者がしだいに増えていったとするのが通説である。一方の上記二法については、新聞の過激な言論を抑え込むために布告されたものであり、それによって新聞が次々に筆禍をこうむり、あるいは新聞人が禁獄刑によって名をあげたことなどが中心に語られてきた⁽¹⁶⁾。しかし本稿の検討結果は、すくなくとも短期的には、民撰議院設立建白書ではなく、二法の影響のほうがより大きかったことを示唆している。建白書掲載後と二法布告後における判明者の動向をみるかぎり、後者の影響がはるかに大きいのである。とはいえ、この変化がどのような具体的内容を伴っていたかについては、本稿では検討していない。この点は今後の課題としたい。

また上記以外にも、今回の調査・分析によっていくつかの点があきらかとなった。それによって、投書者に関して今後どのような方向で調査を進めていくべきか、一定の見通しがえられたように思われる。まず官員は、投書者のうち多数を占めていた職業でもあり、所属する中央・地方官庁、勅・奏任官か判任官かなど、いくつかの属性に関して、その投書内容とともにさらに詳しく検討する必要がある。また名望家層にかんしては、投書がさかんな地域、投書数の比較的多い投書者もあきらかになった。こうした地域・投書者は、今回調査した新聞以外にもさまざまな雑誌・地方紙などのメディアで活発に活動している可能性が高く、より踏み込んだ調査が可能であると推定される。これら以外にも、今回の調査でははっきりしない点が多かったため言及しなかったが、この時期数多く存在した政治・学術結社と投書者の関連についても調査を進める予定である。

注

- (1) 調査対象の新聞や投書欄についての詳細は、拙稿(2014a)「1870年代の新聞投書者の動向に関する一考察」『成蹊大学文学部紀要』49, 155-171 ページを参照。
- (2) なおこの時期の新聞読者層研究に関しては、内川芳美(1961)「新聞読者の変遷」『新聞研究』120, 19-27 ページ、山本武利(1981)『近代日本の新聞読者層』法政大学出版社などを参照。
- (3) 山本武利(1981)同上書, 355 ページ。
- (4) 小新聞にかんしては土屋礼子(2002)『大衆紙の源流』世界思想社の業績に、筆者が若干の知見を加えている(拙稿(2014b)「(研究ノート)1870年代の小新聞投書者について」『成蹊人文研究』22, 31-45 ページ)。またこの時期の新聞投書がもった意義に関しては、中島義範(1991)『新聞投書論』晩聲社がある。
- (5) ただし読者層の研究は、投書者の調査以上に困難であることはいうまでもない。『近代日本の新聞読者層』を著した山本武利が、読者層研究にじつに15年以上の時日を費やしたということが、その困難さを余すところなくものがたっている。
- (6) 本稿の投書者調査で用いた人名辞典等については、拙稿(2014b)前掲論文の注を参照。今回の調査であらたに用いた人名辞典等についてはタイトルと発行年のみ以下に記す。『和学者総覧』(1990年)、『福沢諭吉門下』(1995年)。その他複数の人名が掲載されている論文・書籍で調査に用いたものとしては、松崎欣一(1995)「三田政談会・政談社演説会について」『近代日本研究』12, 澤大洋(1995)『共存同衆の生成』青山社、同(1998)『都市民権派の形成』吉川弘文館、勝田政治(2010)『小野梓と自由民権』有志舎。また個々の投書者にかんする論文、1870年代に発行された中央・地方の官員録・職員録、同時代の書籍・小伝なども数多く参照したが、スペースの都合上割愛させていただく。
- (7) なお投書のなかには、複数人が連名で投書しているものもある。この連名の投書数は、投書全体で103件、

連名の投書者は累計で324名いる。属性の判明した投書者の投書にも連名の投書が含まれているケースがあるため、個々の投書者の投書数を合計すると実際の投書掲載数よりも若干多くなる。しかしこれは投書数の計算上やむを得ない問題である。たとえば、1件の投書に2名が連名で署名し、それぞれの本籍が東京と静岡であったとする。この場合、①東京と静岡の投書者でそれぞれ1件として合計すると投書数が2件となり、実際の数より多くなってしまふ。しかし②投書数を1件として本籍を東京と静岡のいずれか一方のみにすれば、今度は本籍が1件欠落してしまう。このためいずれの計算方法でも誤差が生じるが、連名の投書数は全体の投書数に比してきわめて少数であり、投書の傾向性を検討するうえでほとんど影響はないと判断し、本稿では①の計算方法を用いている。

- (8) 以下、小新聞のデータに関しては拙稿(2014b)前掲論文を参照している。
- (9) 投書に住所が記されているのは投書者全体の6割強である。また投書の一部には、「在東京 愛媛県下平民」といったように、府県名などの住所が2つ記載されているものもある。上記の例では、「東京」に寄留している「愛媛県」を本籍とする「平民」であることがほぼ確実であるため、こうした場合は投書者の住所を「愛媛県」として集計した。
- (10) 田崎公司監修(2004)『東京曙新聞 復刻版 解題』柏書房、25ページ。
- (11) ただし官員数が多い原因には、投書者の調査にもちいた資料上の特性も関係していると思われる。調査では種々の人名辞典にくわえ、当時発行された官員録を相当数参照したが、他の職業には官員録に該当するものがほぼ存在しないため、これが判明者のうち官員が多くなった一因である可能性がある。また、官員、新聞・雑誌関係者、教育関係者については、1870年代になんらかのかたちでその職業に携わった者に限定して集計している。この点については付表の注3を参照。
- (12) 名望家については、名望家であることを裏付ける詳しい経歴が分かった者以外は、県議や郡長、区長などの役職をもとに名望家に分類した。
- (13) 山本武利(1981)前掲書、63-69ページ。
- (14) 山本武利(1981)前掲書、65ページ。
- (15) 当該条文は次の通り。「第八条 新聞紙及雑誌・雑報の筆者は(投書者は筆者を以て例す)、尋常の瑣事を除くの外、凡そ内外国事・理財・人情・時態・學術・法教・議論、及事官民の權利に係る者は、皆其の姓名・住所を著すべし。／筆者、変名を用いたる時は、禁獄三十日、罰金十円を科す。他人の名を仮托する者は、禁獄七十日、罰金二十円を科す(二罪併せ科し或は偏へに一罪を科す。以下之に倣へ)」(松本三之介・山室信一校注(1990)『日本近代思想体系 11 言論とメディア』岩波書店、414ページ。なお片仮名は平仮名に改めた)。
- (16) 稲田雅洋(2000)『自由民権の文化史』筑摩書房、山本武利(1981)前掲書など。

付表 判明者リスト

	主な筆名	本名・別称等	投書掲載数						生没年	本籍または出身地	族籍	投書時前後の職業等								
			東日	報知	朝野	曙	横塚	真事				計	官	名	新	医	宗	職業詳細		
1	岡本長之、浪花翁	岡本長之	1	54	0	0	0	0	55	1817 ※ - 1881	東京	士族	◎	—	◎	—	—	—	開拓使、「報知」	
2	井口無加之、井口柿園	井口無加之	0	0	54	0	0	0	54	—	石川 ※	—	—	◎	—	—	—	—	『石川新聞』主筆、県議	
3	楠秀、尾崎行雄	尾崎行雄	1	5	1	46	0	0	53	1858 - 1954	神奈川	士族	◎	◎	◎	—	—	—	『民間雑誌』『新潟新聞』	
4	植榎徑、中須賀竹治	植木枝盛	4	33	4	1	0	0	42	1857 - 1892	高知	士族	—	◎	◎	—	—	—	『海南新誌』、県議、衆院	
5	杉山藤次郎	杉山益世	1	0	0	34	0	0	35	—	埼玉	平民	—	—	◎	—	—	—	小説家	
6	上野清	上野清	28	0	3	0	0	0	31	1854 - 1924	東京	士族 ※	—	—	—	—	◎	—	数学啓蒙家	
7	小栗松鶴	小栗武右衛門	1	28	0	0	0	1	30	1814 - 1894	静岡	平民	—	—	—	—	—	—	—	
8	浅野乾、高井俊	浅野乾	8	0	21	0	0	0	29	1859 - ?	静岡	士族	—	—	◎	—	—	—	『朝野』社主	
9	津田仙	津田仙	6	8	7	3	4	0	28	1837 - 1908	千葉	士族	—	—	◎	—	—	◎	学農社、「農業雑誌」	
10	島村泰	島村洋堂	3	12	6	1	1	5	28	—	東京	士族	◎	—	—	—	—	—	大蔵省	
11	谷口逸三、谷雲根	溪口一蔵	3	6	1	1	16	1	28	1844 ※ - 1879	神奈川	平民 ※	◎	—	—	—	—	◎	正院、司法省	
12	中田豪晴、中田鶴城	中田豪晴	0	0	16	9	0	0	25	? - 1918 ※	岡山	士族 ※	◎	—	◎	—	—	—	『東北新聞』記者	
13	高橋古三郎、高橋忍南	高橋忍南	1	0	0	0	1	22	24	1822 - 1918	愛知	士族	◎	◎	—	—	—	—	郡書記	
14	小室重弘	小室重弘	0	0	0	24	0	0	24	1858 - 1908	栃木	士族	—	—	◎	—	—	—	『栃木新聞』、衆院	
15	大枝美福	大枝美福	0	0	0	23	0	0	23	—	埼玉	士族	◎	—	—	—	—	—	埼玉県	
16	馬城山人、馬城台二郎	大井憲太郎	5	0	0	0	0	17	22	1843 - 1922	大分	平民	◎	—	◎	—	—	—	元老院、「曙」主筆	
17	江南哲夫、蝦農狂生	江南哲夫	1	16	0	4	0	0	21	1853 - 1916	福島	士族	—	—	—	—	—	—	慶應義塾塾生、実業家	
18	大川清、本山彦一	本山彦一	0	20	1	0	0	0	21	1853 - 1932	熊本	士族	◎	—	◎	—	◎	—	大蔵省、「大阪新報」	
19	笹島吉太郎	笹島靖洲	0	0	2	17	2	0	21	1857 - 1920	茨城	平民	—	—	◎	—	—	—	『曙』仮編集長、「茨城新報」	
20	関新吾	関新吾	11	0	2	7	0	0	20	1854 - 1915	岡山	士族	◎	—	◎	—	—	—	『曙』記者、元老院	
21	東直之助	東直之助	4	0	12	4	0	0	20	? - 1881	和歌山 ※	—	—	—	◎	—	—	—	『曙』記者	
22	斗个沢汪	斗ヶ沢汪	1	1	3	0	0	15	20	—	岩手	士族	◎	—	—	—	—	—	司法省、山形	
23	浜野藤一郎	浜野藤一郎	1	0	2	17	0	0	20	—	栃木	平民	—	◎	—	—	—	—	村長、県議	
24	干河岸貫一	干河岸貫一	17	0	0	0	0	2	19	1848 - 1930	福島	平民	—	—	◎	—	—	◎	真宗僧侶、「東日」	
25	大橋奇勇、三木川清	三木川清	2	16	1	0	0	0	19	—	大分 ※	—	—	—	—	—	—	—	慶應義塾出版局 ※	
26	鏡湖花蔭、下沢保躬	下沢保躬	8	3	1	0	0	6	18	1838 - 1896	青森	士族	—	—	—	—	—	◎	国学者、神職	
27	星野康斎	星野康斎	2	9	7	0	0	0	18	—	広島	士族	—	—	—	◎	—	—	私塾	
28	甲藤大器	甲藤大器	0	18	0	0	0	0	18	1853 - 1928	高知	士族	—	—	◎	—	—	—	『東海経済新報』記者	
29	立花光臣	古沢滋	0	10	0	0	0	7	17	1847 - 1911	高知	士族	◎	—	◎	—	—	—	『大阪日報』社長	
30	渡辺高、渡辺晴雪	渡辺晴雪	2	0	14	0	0	0	16	1856 - 1912	兵庫	士族	—	—	◎	—	—	—	川崎造船所	
31	成島柳北、墨上漁客	成島柳北	0	7	9	0	0	0	16	1837 - 1884	東京	士族	—	—	◎	—	—	—	漢詩人、「朝野」主筆	
32	下村房次郎	下村房次郎	15	0	0	0	0	0	15	1856 - 1913	和歌山	士族	◎	◎	◎	—	—	—	『和歌山日日新聞』、県議	
33	山田改一	山田改一	9	5	1	0	0	0	15	1831 - 1899	青森	平民	—	◎	—	—	—	—	県議	
34	角利助、角理輔	角利助	1	14	0	0	0	0	15	1853 - 1928	三重	平民	—	◎	◎	—	—	—	『伊勢新聞』、県議	
35	関本三泉	関本寅	1	14	0	0	0	0	15	—	山形 ※	—	◎	—	—	—	—	—	司法省	
36	神奈垣魯文、 紀ノ於呂香	仮名垣魯文	0	2	2	3	4	4	15	1829 - 1894	東京	平民	—	—	◎	—	—	—	—	戯作者、「仮名談」主筆
37	石亀福寿	寺田福寿	8	0	6	0	0	0	14	1853 - 1894	福井	—	—	—	—	—	—	◎	真宗僧侶	
38	飯塚方	飯塚方	7	0	3	0	0	4	14	1814 ※ - ?	埼玉 ※	—	—	—	—	—	—	—	農業	
39	加藤政之助	加藤城陽	4	4	0	6	0	0	14	1854 - 1941	埼玉	平民	◎	◎	◎	—	—	—	『民間雑誌』、県議、衆院	
40	西河通徹	西河通徹	0	0	9	5	0	0	14	1856 - 1929	愛媛	士族	—	—	◎	—	—	—	『評論新聞』『海南新聞』	
41	内海直賢	内海直賢	10	0	2	0	0	1	13	—	三重	平民	◎	—	◎	—	—	—	『大阪出版物備新報』	
42	森定助、森定保、 森保定	森嶋村	5	1	1	6	0	0	13	1831 - 1907	栃木	平民	◎	◎	—	—	—	—	—	県議、「文明新誌」社長
43	鈴木静蔵	鈴木静蔵	1	12	0	0	0	0	13	—	三重	平民	◎	—	—	—	—	—	三重県	
44	桑田衡平	桑田衡平	1	12	0	0	0	0	13	1836 - 1905	埼玉	平民	◎	—	—	◎	—	—	陸軍省	
45	中村敬宇、敬宇散人	中村正直	1	11	0	1	0	0	13	1832 - 1891	東京	士族	◎	—	◎	—	◎	◎	—	同人社、啓蒙思想家
46	草間時福	草間時福	0	1	11	1	0	0	13	1853 - 1932	京都	士族	◎	—	◎	—	◎	—	—	『朝野』記者、「北越新聞」
47	小笠原長道、 山陰案山子	小室信介	0	1	0	0	0	12	13	1852 - 1885	京都	士族	—	—	◎	—	◎	—	—	天橋義塾、「大阪日報」
48	池内広愛	池内広愛	0	0	1	12	0	0	13	1852 - ?	埼玉	士族	—	—	—	—	—	—	—	
49	池上三郎	池上三郎	12	0	0	0	0	0	12	1855 - 1914	福島	士族	◎	—	◎	—	—	—	—	『東日』記者、司法省
50	安藤勝任	安藤勝任	4	5	0	2	0	1	12	? - 1878	茨城	士族	—	—	—	—	—	—	—	同人社
51	栗本錦雲、龜庵老人	栗本龜庵	0	11	0	0	1	0	12	1822 - 1897	東京 ※	士族	—	—	◎	◎	—	—	—	『報知』主筆
52	田口卯吉、黄東山樵	田口卯吉	0	7	0	0	5	0	12	1855 - 1905	静岡	士族	◎	—	◎	—	—	—	—	大蔵省、「東京経済雑誌」
53	宮城復軒、大木規子	大槻文彦	6	2	3	0	0	0	11	1847 - 1928	東京	士族	◎	—	◎	—	◎	—	—	国語学者、師範学校長

	主な筆名	本名・別称等	投書掲載数						生没年	本籍または出身地	族籍	投書時前後の職業等								
			東日	報知	朝野	曙	横毎	真事				計	官員	名望	新聞	医師	教育	宗教	職業詳細	
54	国沢会造、細川瀏	細川瀏	4	6	1	0	0	0	11	1856 - 1935	高知	士族	○	—	○	—	—	—	—	文部省、「東日」、宣教師
55	山脇巖	山脇巖	4	0	0	7	0	0	11	1856 - 1923	岡山	士族	○	—	○	—	—	—	—	『評論新聞』『大阪日報』
56	堀見景正	堀見景正	1	6	4	0	0	0	11	—	高知	士族	○	—	—	—	—	—	—	高知県
57	措宣生、内田誠成	内田誠成	0	0	11	0	0	0	11	—	島根	士族	—	—	○	—	—	—	—	『朝野』 飯橋集長
58	海内果	海内果	10	0	0	0	0	0	10	1850 - 1881	富山	平民※	—	○	○	—	—	—	—	県議（辞退）、「東日」記者
59	山辺勇輔	山辺勇輔	10	0	0	0	0	0	10	1857 - ?	佐賀	平民	—	—	—	○	—	—	—	「東日」記者、司法省
60	新宮誠二	松山誠二	4	3	1	2	0	0	10	—	和歌山	平民	—	—	—	○	—	—	—	東大予備門教員
61	曲木如長	曲木如長	4	0	6	0	0	0	10	1858 - 1913	東京	士族	○	—	—	—	—	—	—	陸軍省、大審院
62	津田真道、天外如来	津田真道	1	8	1	0	0	0	10	1829 - 1903	岡山	士族	○	—	—	—	—	—	—	陸軍省、元老院、衆院
63	小田清雄	小田清雄	1	2	4	0	0	3	10	1848 - 1894	大阪	平民	—	—	—	—	○	○	—	祠官、中講義
64	小松原英太郎	小松原英太郎	1	0	2	7	0	0	10	1852 - 1919	岡山	士族	○	—	○	—	○	—	—	『評論新聞』、外務省
65	秋月得生軒、牛門外史	秋月禰門	0	10	0	0	0	0	10	1809 - 1880	大分	士族	—	—	—	○	—	—	—	儒者、県知事
66	佐々城	佐々城謙益	0	10	0	0	0	0	10	—	宮城	—	—	○	—	—	—	—	—	町議
67	三栗中実	三栗中実	9	0	0	0	0	0	9	—	東京	平民	—	—	○	—	—	—	—	「東日」編集長
68	村部元之助	村部元之助	8	1	0	0	0	0	9	1838 - ?	三重	平民	—	—	—	—	—	—	—	私塾※
69	猪勇男	海妻猪勇男	5	0	0	3	0	1	9	—	福岡	士族	○	—	—	—	—	—	—	警視庁
70	森藤右衛門	森藤右衛門	3	5	1	0	0	0	9	1842 - 1885	山形	平民	—	○	—	—	—	—	—	「兩羽日日新聞」、県議
71	物集高村	物集高村	2	0	0	7	0	0	9	1848 - ?	大分	士族	○	—	—	—	—	—	—	司法省
72	古水度、古渡資秀	古渡資秀	1	6	0	1	0	1	9	1851 - 1879	茨城	士族	—	—	○	—	—	—	—	『民間雑誌』記者
73	佐竹慧昭	佐竹慧昭	1	2	3	2	0	1	9	—	東京	平民	—	—	—	—	—	—	—	—
74	柴田知行	柴田知行	0	5	1	2	0	1	9	—	愛媛	士族	○	—	—	—	—	—	—	内務省
75	吉田次郎	吉田次郎	0	1	3	4	1	0	9	—	静岡	士族	○	—	○	—	—	—	—	大蔵省、「報知」
76	沼開守一	沼開守一	0	0	5	4	0	0	9	1843 - 1890	東京	士族	○	○	—	—	—	—	—	元老院、「横毎」、府議
77	桜溪信、桜溪老人	若林有信	0	0	1	0	8	0	9	1821 - 1895	東京	平民※	—	○	—	—	—	—	—	学区取締
78	久保田貫一	久保田貫一	6	0	2	0	0	0	8	1850 - 1942	兵庫	士族	○	—	○	—	—	—	—	「東日」編集長、外務省
79	佐田白茅	佐田素一郎	6	0	0	2	0	0	8	1832 - 1907	福岡	士族	○	—	○	—	—	—	—	外務省、「明治詩文」
80	大江孝之	大江敬香	2	1	1	4	0	0	8	1857 - 1916	徳島	—	—	—	○	—	—	—	—	『静岡新聞』『山陽新報』
81	牛場生	牛場卓造	1	7	0	0	0	0	8	1850 - 1922	三重	平民	○	—	○	—	—	—	—	「報知」記者、兵庫県、衆院
82	中島雄	中島雄	1	6	0	0	0	1	8	1853 - 1910	静岡	士族	○	—	—	—	—	—	—	外務省
83	十文字信介	十文字信介	1	1	3	2	1	0	8	1852 - 1908	宮城	士族	○	○	—	—	○	—	—	『農業雑誌』編集、郡長
84	猫尾道人	福地源一郎	0	8	0	0	0	0	8	1841 - 1906	長崎	士族	○	—	○	—	—	—	—	「東日」主筆、東京府議
85	大野津雲	大野津雲	0	7	0	0	0	1	8	? - 1899	新潟	士族	○	—	—	○	—	—	—	軍医
86	坂本忍	坂本忍	0	2	2	0	0	4	8	—	兵庫	士族	○	—	—	—	—	—	—	師範学校教員
87	橋楊洲、楊洲酔史	古橋楊洲	0	0	1	7	0	0	8	—	埼玉	士族	○	○	—	—	—	—	—	郡書記
88	三木貞一	三木愛花	7	0	0	0	0	0	7	1861 - 1933	千葉	平民	—	—	○	—	—	—	—	『春野草誌』『東京新誌』
89	中山元成、中山蘭華	中山元成	7	0	0	0	0	0	7	1818 - 1892	茨城	平民	○	○	—	—	—	—	—	千葉県、茶業家
90	丸山名政	丸山名政	5	0	0	2	0	0	7	1857 - 1922	長野	士族	○	—	○	—	—	—	—	『法律叢談』、衆院
91	福沢諭吉	福沢諭吉	4	1	1	0	1	0	7	1834 - 1901	大分	士族	—	—	○	—	—	—	—	明六社、慶應義塾
92	加藤九郎	加藤九郎	3	4	0	0	0	0	7	1830 - 1890	大阪	士族	○	—	○	—	—	—	—	『采風新聞』『読売』
93	江馬活堂	江馬活堂	3	2	0	0	0	2	7	1806 - 1891	岐阜	士族	—	—	—	○	—	—	—	本草学者
94	脇山義保	脇山義保	3	0	2	0	0	2	7	? - 1891	岩手	士族	○	—	○	—	—	—	—	青森県、伝道師
95	中川泰	中川泰	2	5	0	0	0	0	7	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	種痘医
96	伊坂淑人	伊坂柳久	1	6	0	0	0	0	7	1848 ※ - ?	徳島	士族	—	—	○	—	—	—	—	『普通新聞』記者
97	浜田徳太郎	浜田徳太郎	1	5	0	1	0	0	7	—	徳島	—	○	—	—	—	—	—	—	司法省
98	研堂憲思齋、渡部思齋	渡部思齋	0	7	0	0	0	0	7	1832 - 1889	福島	—	—	○	—	—	—	○	—	教育者、県議
99	村上定	村上定	0	1	0	6	0	0	7	1857 - 1932	広島	士族	—	—	—	○	—	—	—	「山梨日日新聞」記者
100	石坂金一郎	石坂金一郎	0	1	0	1	0	5	7	1857 - 1915	埼玉	平民	○	○	—	—	—	—	—	郡書記、県議
101	吉岡徳明、吉岡篤明	吉岡徳明	0	0	6	0	0	1	7	1829 - 1898	茨城	平民	—	—	—	—	—	—	○	国学者
102	小松正胤	小松正胤	0	0	5	2	0	0	7	—	高知	—	○	—	○	—	—	—	—	宮内省、「評論新聞」記者
103	宮島陸一郎	宮島陸一郎	0	0	0	7	0	0	7	—	長野	平民	—	—	—	—	—	—	—	—
104	曾田愛、曾田相	曾田愛三郎	0	0	0	7	0	0	7	? - 1891	島根	士族	—	—	○	—	—	—	—	「自由新聞」
105	高橋通明	高橋通明	0	0	0	0	0	7	7	1840 - 1910	山形	士族	○	—	—	—	—	—	—	警視庁
106	柴四朗、柴四郎	東海散士	6	0	0	0	0	0	6	1852 - 1922	福島	士族	—	—	○	—	—	—	—	小説家、衆院
107	蘇我総八郎	蘇我総八郎	6	0	0	0	0	0	6	—	長崎	士族	○	—	○	—	—	—	—	大蔵省、「東京自由新聞」
108	中島周賢	中島周賢	2	0	2	0	0	2	6	—	熊本	士族	○	—	○	—	—	—	—	警視庁、「熊本新聞」
109	岸国華、墨江桜	岸田吟香	1	4	1	0	0	0	6	1833 - 1905	岡山	平民	—	—	○	—	—	—	—	薬商、「東日」編集長
110	岡本監輔、東洋航客	岡本監輔	1	3	2	0	0	0	6	1839 - 1904	徳島	士族	○	—	○	—	—	—	—	陸軍省、「内外兵事新聞」

	主な筆名	本名・別称等	投書掲載数						生没年	本籍または出身地	国籍	投書時前後の職業等						
			東日	報知	朝野	曙	横毎	真事				計	官員	名望	新聞	医師	教育	宗教
282	鍋倉直	鍋倉直	2	0	0	0	0	2	1854 - ?	鹿児島	士族	—	—	—	—	—	銀行家	
283	猪飼麻治郎	猪飼麻二郎	2	0	0	0	0	2	1855 - 1901	大分	士族	—	—	—	◎	—	慶應義塾塾長、交詢社	
284	後藤直彦	後藤直彦	2	0	0	0	0	2	1846 - ?	大分	士族	—	◎	—	—	—	県議	
285	早川正利	早川正利	2	0	0	0	0	2	—	新潟	平民	—	◎	—	—	—	県議	
286	相賀信量	相賀信量	2	0	0	0	0	2	—	熊本	士族	◎	—	—	—	—	工部省	
287	竹井懿貞	竹井懿貞	2	0	0	0	0	2	1854 - 1903	埼玉	平民※	◎	◎	—	—	—	戸長、県議、衆院	
288	高谷衷	高谷竜洲	2	0	0	0	0	2	1818 - 1895	大分	平民	—	—	◎	—	—	私塾、『奎運鳴盛録』	
289	貫名駿一郎	貫名駿一郎	2	0	0	0	0	2	—	京都	平民	◎	—	—	—	—	警視庁	
290	中島一男	中島一男	2	0	0	0	0	2	? - 1882	滋賀	士族	◎	—	—	—	—	太政官	
291	黒野義文	黒野義文	2	0	0	0	0	2	? - 1917	東京	士族	◎	—	—	◎	—	東京外国語学校	
292	平井信梯	平井信梯	2	0	0	0	0	2	—	埼玉	平民	◎	—	—	◎	—	内務省	
293	園田譲	園田譲	2	0	0	0	0	2	—	千葉	士族	◎	—	—	—	—	大蔵省、大審院	
294	中山寛六郎	中山寛六郎	2	0	0	0	0	2	1853 - ?	茨城	平民	—	—	—	—	—	米国留学生	
295	若井平世	若井平世	2	0	0	0	0	2	—	栃木	士族	◎	—	—	—	—	水沢県、大審院	
296	長谷川芳之助	長谷川芳之助	2	0	0	0	0	2	1856 - 1912	佐賀	士族	—	—	—	—	—	米国留学生、三菱会社	
297	高木貞衛	高木貞衛	2	0	0	0	0	2	1857 - 1940	徳島	士族	—	—	○	—	—	自助社、『大阪日報』	
298	三宅最平	三宅最平	2	0	0	0	0	2	1843 - 1918	岡山	平民※	○	◎	—	—	—	実業家、戸長、町議	
299	加藤弘之	加藤弘之	2	0	0	0	0	2	1836 - 1916	兵庫	士族	◎	—	—	—	—	文部省、元老院、貴族院	
300	柏原謙益	柏原謙益	2	0	0	0	0	2	1827 - 1896	香川	士族	◎	—	—	◎	—	陸軍省	
301	杉浦正臣	杉浦退蔵	2	0	0	0	0	2	1848 - 1888	滋賀	士族	◎	—	—	—	—	大蔵省	
302	正田章次郎	正田章次郎	2	0	0	0	0	2	1855 - 1927	栃木	平民※	—	—	—	—	—	鑄物師、銀行頭取	
303	藤埴正邦	藤埴正邦	2	0	0	0	0	2	1856 - 1897	京都	平民	◎	—	◎	—	○	内務省、『法律雑誌』	
304	間野道兼	間野留心斎	2	0	0	0	0	2	1855 - 1921	大分	士族	—	—	—	○	—	二松学舎塾長	
305	空洞山人、石阪空洞	石坂堅社	2	0	0	0	0	2	1814 - 1899	岡山	士族	—	—	—	◎	—	博物学者	
306	芳川修平	芳川修平	2	0	0	0	0	2	—	埼玉	士族	—	—	—	—	—	—	
307	細川護久	細川護久	2	0	0	0	0	2	1839 - 1893	熊本	華族	—	—	—	—	—	元熊本藩知事	
308	宮原確	宮原確	2	0	0	0	0	2	—	愛知	士族	—	—	—	◎	—	私学校	
309	成瀬正忠	成瀬正忠	2	0	0	0	0	2	1856 - 1942	—	—	—	—	—	○	—	商法講習所生徒	
310	吉田復	吉田復	1	1	0	0	0	2	? - 1879	京都	平民	◎	—	—	—	—	開拓使	
311	重久安都男	重久安都男	1	1	0	0	0	2	—	鹿児島	士族	◎	—	—	—	—	開拓使	
312	須藤熊男	須藤熊男	1	1	0	0	0	2	—	山形	士族	◎	—	—	—	—	開拓使	
313	小山茂	小山茂	1	1	0	0	0	2	—	神奈川	平民	◎	—	—	—	—	神奈川県	
314	千葉繁	千葉繁	1	1	0	0	0	2	—	千葉	—	◎	—	—	—	—	神奈川県	
315	村田光太郎	村田光太郎	1	1	0	0	0	2	—	山口	士族	◎	—	—	—	—	司法省	
316	天野御民	天野御民	1	1	0	0	0	2	1841 - 1903	山口	士族	◎	—	◎	—	—	大蔵省、『愛媛新聞』	
317	岡松径	岡松径	1	1	0	0	0	2	1850 - 1916	静岡	士族	◎	—	—	—	—	太政官、統計学者	
318	関謙之	関嵯益	1	1	0	0	0	2	1854 - 1907	大分	士族	◎	—	◎	—	—	内務省、『報知』	
319	泉房儀	泉房儀	1	1	0	0	0	2	—	千葉	士族	—	—	—	—	—	—	
320	中田良夫	中田良夫	1	1	0	0	0	2	1845 - 1894	新潟	平民	◎	—	◎	—	—	工部省、『栃木新聞』	
321	桑原照登	桑原照登	1	0	1	0	0	2	—	広島※	士族※	—	—	○	—	—	『美さき新聞』主幹	
322	丘田政成、丘田政徳	岡田政徳	1	0	1	0	0	2	—	新潟	平民	◎	—	—	—	—	大蔵省	
323	溝口喜逸	溝口喜逸	1	0	1	0	0	2	—	滋賀	—	◎	—	—	—	—	大蔵省	
324	中神守洋	中神守洋	1	0	1	0	0	2	—	東京	士族	◎	—	—	—	—	大蔵省	
325	佐久間国三郎	佐久間国三郎	1	0	1	0	0	2	1845 - ?	岐阜	平民	◎	◎	—	—	—	戸長、県会議長	
326	竹内明太郎	竹内明太郎	1	0	1	0	0	2	1860 - 1928	高知	士族※	—	—	○	—	—	実業家、『絵入自由新聞』	
327	堅山理一郎	堅山理一郎	1	0	1	0	0	2	—	広島	平民	◎	—	—	—	—	司法省	
328	山本守時	山本守時	1	0	1	0	0	2	? - 1904	高知	士族	◎	—	—	—	—	司法省	
329	後藤祐護	後藤祐護	1	0	1	0	0	2	1826 - 1895?	兵庫※	—	—	—	—	—	◎	真宗僧侶	
330	井口久次郎	井口久次郎	1	0	1	0	0	2	—	東京	平民	—	◎	—	—	—	町総代人	
331	郡司盛武	郡司盛武	1	0	1	0	0	2	—	宮崎	士族	◎	—	—	—	—	宮崎県、兵庫県	
332	竹腰正美	竹腰正美	1	0	1	0	0	2	1819 - 1882	岐阜	華族	—	—	—	—	—	元尾張藩家老	
333	小野道一	小野道一	1	0	1	0	0	2	1850 - 1895	高知	士族	◎	—	—	—	—	度会県	
334	三宅虎太	三宅虎太	1	0	1	0	0	2	—	岡山	士族※	—	—	—	—	—	出版人	
335	志賀直道	志賀直道	1	0	1	0	0	2	1818 - 1906	福島	士族	—	—	—	—	—	—	
336	藤波重好	藤波重好	1	0	0	1	0	2	1813 - ?	埼玉	—	—	—	—	—	—	国学者	
337	吉田市十郎	吉田市十郎	1	0	0	1	0	2	1845 - 1906	埼玉	平民	◎	◎	—	—	—	内務省、社会事業家	
338	坂本南海男	坂本直寛	1	0	0	1	0	2	1853 - 1911	高知	士族	—	—	◎	—	—	牧師、『土陽雑誌』	

	主な筆名	本名・別称等	投書掲載数						生没年	本籍または出身地	族籍	投書時前後の職業等								
			東日	報知	朝野	曙	横毎	真事				計	官員	名望	新聞	医師	教育	宗教	職業詳細	
396	久島惇徳	久島惇徳	0	2	0	0	0	0	2	—	和歌山	士族	—	—	—	—	—	—		
397	橋爪幸昌	橋爪幸昌	0	2	0	0	0	0	2	1849 ※ - ?	青森	士族	—	—	—	—	—	—		
398	江口高達	浅見高達	0	2	0	0	0	0	2	1855 - ?	熊本	士族	○	—	◎	—	—	協議社、「内外交際新誌」		
399	津田儀三郎、津田颯松	津田儀三郎	0	2	0	0	0	0	2	—	京都	平民	—	—	—	—	—	—		
400	藤田喜三郎	藤田喜三郎	0	2	0	0	0	0	2	—	京都	士族	—	—	—	—	—	—		
401	気賀敬太郎	気賀敬太郎	0	2	0	0	0	0	2	—	静岡	—	—	—	—	—	—	金融業		
402	江口高邦	江口高邦	0	1	1	0	0	0	2	—	熊本	士族	○	◎	○	—	—	「山陽新報」、東京府議		
403	気賀林、淡庵気賀林	気賀林右衛門	0	1	1	0	0	0	2	1810 - 1883	静岡	平民※	—	◎	—	—	—	地域開発者、製茶業		
404	原近知	原近知	0	1	1	0	0	0	2	—	静岡	士族	◎	—	—	—	—	栃木県		
405	鳴門義民	鳴門義民	0	1	1	0	0	0	2	1835 - 1914	徳島	平民	◎	—	—	◎	—	内務省		
406	浅田栗園	浅田宗伯	0	1	1	0	0	0	2	1815 - 1894	長野	士族	—	—	◎	—	—	東宮侍医		
407	島本青宣	島本半七	0	1	1	0	0	0	2	1819 - 1897	東京	—	—	—	—	—	—	俳人		
408	武藤風六	武藤風六	0	1	0	0	1	0	2	—	福岡	士族	◎	—	—	—	—	大蔵省		
409	阪谷素	阪谷朋廬	0	1	0	0	1	0	2	1822 - 1881	岡山	士族	◎	—	—	—	—	漢学者、司法省		
410	広川晴軒、広川徳三郎	広川亀七	0	1	0	0	1	0	2	1803 - 1884	新潟	平民	—	—	—	—	—	洋学者		
411	大内青澄	大内青澄	0	1	0	0	0	1	2	1845 - 1918	宮城	平民	—	—	◎	—	◎	仏教家、「明教新誌」		
412	半井真澄	半井真澄	0	1	0	0	0	1	2	1843 - 1917	愛媛	士族	—	—	—	—	—	官司		
413	波多野承五郎	波多野承五郎	0	1	0	0	0	1	2	1858 - 1929	静岡	士族	○	◎	◎	—	◎	「報知」記者、東京府議		
414	少講義伎人戒心	伎人戒心	0	1	0	0	0	1	2	1839 - 1920	兵庫	—	—	—	—	—	◎	真言宗学僧		
415	平島及平	平島及平	0	1	0	0	0	1	2	—	熊本	—	—	—	—	—	—	法学校生徒、日大創立者		
416	近藤芳樹	近藤芳樹	0	1	0	0	0	1	2	1801 - 1880	山口	士族	◎	—	—	—	—	山口県、国学者		
417	伊香八太郎	伊香敬興	0	1	0	0	0	1	2	—	青森	平民※	—	—	—	—	—	酒造業、国学者		
418	今村長善	今村長善	0	0	2	0	0	0	2	—	新潟	士族	◎	—	—	—	—	愛媛県、代言人		
419	坂正臣	坂正臣	0	0	2	0	0	0	2	1855 - 1931	愛知	平民	—	—	—	◎	—	歌人、書家		
420	若菜屋主人、若菜左袒爾	若菜貞爾	0	0	2	0	0	0	2	1854 - 1918	千葉	平民	○	—	◎	—	—	戯作者、「仮名読」		
421	矢島中	矢島中	0	0	2	0	0	0	2	1851 - 1922	栃木	士族	—	◎	—	—	—	—	県議、町長	
422	信太歌之助	信太歌之助	0	0	2	0	0	0	2	1837 - ?	東京	士族	○	—	—	—	—	—	奈良県、鉱山業	
423	中重福	中重福	0	0	2	0	0	0	2	—	東京	—	◎	—	—	—	—	—	大審院	
424	水越成章	水越成章	0	0	2	0	0	0	2	1849 - 1933	兵庫	士族	◎	—	—	—	—	—	司法省、漢詩人	
425	内田宣弘	内田宣弘	0	0	2	0	0	0	2	1854 ※ - ?	東京	士族	◎	—	—	—	—	—	島根県	
426	瑞徳俊童	瑞徳俊童	0	0	2	0	0	0	2	—	千葉	—	—	—	—	—	◎	曹洞宗住職		
427	西村時四郎	西村時四郎	0	0	2	0	0	0	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	代言人	
428	永山退叟	永山外記	0	0	2	0	0	0	2	1816 - 1881	群馬	士族	—	—	—	—	—	—	元前橋藩参政	
429	星亨	星亨	0	0	2	0	0	0	2	1850 - 1901	東京	士族	◎	—	○	—	◎	—	大蔵省、「自由燈」	
430	田島弥平	田島邦寧	0	0	2	0	0	0	2	1822 - 1898	群馬	—	—	◎	—	—	—	—	養蚕家	
431	手島太長	手島太長	0	0	2	0	0	0	2	1830 - 1890	高知	士族※	—	—	—	◎	—	—	—	
432	田中安国	田中安国	0	0	2	0	0	0	2	—	静岡	士族	—	—	—	—	—	—	—	
433	須賀貴三	須賀貴三	0	0	2	0	0	0	2	—	千葉	—	◎	—	—	—	—	—	陸軍省	
434	近藤真琴	近藤真琴	0	0	1	0	0	1	2	1831 - 1886	三重	士族	◎	—	○	—	—	—	海軍省、攻玉社	
435	転々堂藍泉	高島藍泉	0	0	1	0	0	1	2	1838 - 1885	東京	士族	—	—	◎	—	—	—	戯作者、「読光」	
436	大沢多門	大沢多門	0	0	1	0	0	1	2	1834 - 1906	青森	士族	◎	◎	—	—	—	—	—	戸長、えんぶり復興者
437	藤井綏明	藤井綏明	0	0	1	0	0	1	2	—	大阪	士族	◎	—	—	◎	—	—	—	陸軍省
438	荒木六郎	荒木六郎	0	0	1	0	0	1	2	—	佐賀	士族	—	—	—	—	—	—	—	
439	坂井喜三郎	藤田軌達	0	0	0	2	0	0	2	—	青森	士族	—	—	◎	—	—	—	—	「曙」記者
440	鍵谷竜男	鍵谷竜男	0	0	0	2	0	0	2	—	岐阜	士族	—	—	◎	—	—	—	—	「開知新聞」「英風新聞」
441	上床照載	上床照載	0	0	0	2	0	0	2	1854 ※ - 1889	鹿児島	士族	○	—	—	—	—	—	—	大蔵省
442	松浦正重、松浦政重	松浦正重	0	0	0	2	0	0	2	—	三重	士族	◎	◎	—	—	—	—	—	郡書記
443	橋爪捨蔵	橋爪捨蔵	0	0	0	2	0	0	2	1858 - ?	福島	—	—	◎	—	—	—	—	—	警視庁
444	田村久井	田村久井	0	0	0	2	0	0	2	1851 - 1926	高知	士族	—	—	—	—	—	—	—	兵学寮生徒、陸軍省
445	有待居士主人	那珂宿楼	0	0	0	2	0	0	2	1827 - 1879	岩手	士族	◎	—	◎	—	—	—	—	文部省、「教育新誌」
446	三吉寛	三吉寛	0	0	0	1	0	1	2	—	山口	—	◎	—	—	—	—	—	—	警視庁
447	福本克恭	福本如酔	0	0	0	1	0	1	2	? - 1912	三重	—	—	—	—	—	—	◎	—	神官
448	島地黙雷	島地黙雷	0	0	0	1	0	1	2	1838 - 1911	山口	平民	—	—	—	—	—	◎	—	真宗僧侶
449	鈴木喜一	鈴木喜一	0	0	0	1	0	1	2	—	秋田	平民	—	—	◎	—	—	—	—	代言人、県議
450	野口英夫	野口英夫	0	0	0	0	2	0	2	1856 - 1922	徳島	—	—	◎	◎	—	—	—	—	「甲府日日」主筆、県議
451	森田屋友昇、森田友昇	森田太四郎	0	0	0	0	2	0	2	1834 - ?	東京	—	—	—	—	—	—	—	—	饗節商、俳人
452	諸葛卯之助	諸葛卯之助	0	0	0	0	2	0	2	—	兵庫	—	◎	—	—	—	—	◎	—	神奈川県、祠官

	主な筆名	本名・別称等	投書掲載数						生没年	本籍または出身地	族籍	投書時前後の職業等							
			東日	報知	朝野	曙	横毎	真事				計	官員	名望	新聞	医師	教育	宗教	職業詳細
1023	児玉仲児	児玉仲児	0	0	0	0	0	1	1	1849 - 1909	和歌山	平民	◎	◎	○	—	—	—	大蔵省、県会議長、郡長
1024	沢辺正修	沢辺正修	0	0	0	0	0	1	1	1856 - 1886	京都	士族※	—	◎	○	—	◎	—	天橋義塾、府議
1025	原坦山	原坦山	0	0	0	0	0	1	1	1819 - 1892	福島	士族	—	—	—	—	—	◎	曹洞宗僧侶
1026	山井氏親	山井氏親	0	0	0	0	0	1	1	1857 - ?	—	華族	—	—	—	—	—	—	—
1027	小倉和平	小倉和平	0	0	0	0	0	1	1	1851 ※ - ?	千葉	平民	—	—	—	—	—	—	—
1028	清田嘿	清田黙	0	0	0	0	0	1	1	—	静岡	士族	—	—	—	—	—	—	—
1029	大村邦英	大村邦英	0	0	0	0	0	1	1	—	東京	士族	—	—	—	—	—	—	—
1030	白井秀達	白井秀達	0	0	0	0	0	1	1	—	大阪	平民	—	—	—	—	—	—	—
1031	小池中属	小池友謙	0	0	0	0	0	1	1	—	茨城	士族	◎	—	—	—	—	—	福島県
1032	榎原五百枝	榎原五百枝	0	0	0	0	0	1	1	—	愛知※	—	—	—	—	—	—	◎	神官
1033	平地公作	平地公作	0	0	0	0	0	1	1	—	三重	平民	—	—	—	—	—	—	小学校生徒
1034	天野半九郎	小林更平	0	0	0	0	0	1	1	—	岐阜	士族	—	—	—	—	—	—	—
1035	永田胤禎	永田胤禎	0	0	0	0	0	1	1	—	滋賀	士族	◎	—	—	—	—	—	宮内省
1036	近藤欽一郎	近藤欽一郎	0	0	0	0	0	1	1	—	千葉	士族	◎	—	—	—	—	—	警視庁
1037	稲垣春陽	稲垣春陽	0	0	0	0	0	1	1	—	三重	—	—	—	—	◎	—	◎	神職

(注1) 表中の「※」は推定、「?」は不明、「—」は不明もしくは該当なしをあらわす。

(注2) 「投書時前後の職業等」欄のうち、「名望」は名望家、「新聞」は新聞・雑誌関係者、「教育」は教育関係者、「宗教」は宗教関係者をそれぞれ示す。なお名望家は厳密には職業ではないが、本リストでは幕末期に豪農等であった者以外にも、明治初年に県議や郡長・郡書記、区長などをつとめた者も名望家に分類しているため、職業に準ずるものとして扱った。

(注3) 「投書時前後の職業等」欄の「◎」は1870年代(以降も含む)、「○」は1880年代以降に各職業に関与していたことを示す。ただし、名望家は期間を区切ることを自体適切でないため、また医師、宗教関係者については職業の特殊性を考慮し、上記の区別はしていない。

(注4) 「職業詳細」欄では、判明した職業を可能なかぎり示したが、欄内に入りきらなかった者については、1870年代における主要な職業を優先的に示している。「東京府」などの府県名は地方官庁を示す。県議や郡書記などの場合、本籍地(または出身地)と勤務地が同一府県である場合、府県名は省略している。「衆院」「貴族院」はそれぞれ衆議院、貴族院の議員であったことを示す。